

夕映え

2005 春号 vol.5



1. 私たちは、医療人としての責任を自覚し、研修をおこたらず安全で水準の高い医療の提供に努めます。
2. 私たちは、患者さまが自立した生活を送れるよう身体機能の回復、維持、日常生活動作の改善を支援します。
3. 私たちは、「いつも笑顔で真心こめて」をモットーに、患者様の立場に立った心温まる医療を行います。
4. 私たちは、地域の人々のために、保健・福祉活動の充実に努めます。



最近の厚生年金問題と私たちの病院

院長 上尾 豊二

開かれた病院として社会へ広報するために情報誌の発行を始めて1年がたちました。玉造病院の歴史を皆さんご存知でしょうか。この病院は昭和20年に設立されました。厚生年金保険法第79条に基づいています。昭和19年発足した厚生年金保険制度を補完する福祉施設としての開始です。厚生年金保険制度は創設されたばかりで保険料は納めるけれども受給者はまだいない状態でした。そこで保険加入者に還元するために福祉施設が作られました。設立の趣旨は、戦争の混乱に関連して多くの障害者が発生しましたが、この人たちが社会復帰できるようにすることでした。身体障害からの復帰が目的ですので、当時まだ日本では希少であった整形外科を導入して診療が始まりました。昭和20年の日本敗戦の4ヶ月後に玉造整形外科療養所が温泉旅館暢神亭を借用して畳敷きの客間で開設されました。戦争から復員されたばかりの塩津院長が京都帝大整形外科から赴任され診療が始まりました。新進の骨折治療、関節手術はたちまちのうちに評判を呼び山陰一円ばかりか四国からも患者を迎えることとなりました。整形外科の専門施設は当時中四国地方には存在していない時代です。それから数えて今年60年になります。人間で言えば還暦の年です。人生一区切りといえるでしょうか。世の中の情勢も当時とは様変わり

しました。60年前と異なり少子高齢化の時代となりました。いまでは年金掛け金を支払う人よりも年金を受け取る人が増えてきました。年金財政の逼迫ひっばくです。このために年金制度の変革が迫られ国会での大きな問題になっていることはご承知の通りです。つまり年金財政は年金の現金給付にすべて回して義肢装具の現物給付も福祉のための施設もすべて中止することになりました。病院もその渦中にありますが、社会的影響度から見て病院だけは直ちに廃止売却するのではなく別に考えることとなっています。我々の財産は国有ではあるが経営は民間に委託されている現在の厚生年金病院の運営が公共性を保ちつつ効率的であることを証明してきたと自負しています。医療水準は格段に高く経営も順調で全国全ての厚生年金病院が黒字経営です。このような病院を失うのは日本にとっても財産を失うことになるかと主張しています。世間も我々の主張に同意してくれ玉造病院で行った存続を願う署名運動ではわずか3週間で4万を遙かに超える署名をいただきました。島根県の人口を考えれば大きな数字です。我々自身もこの数字には驚いております。今国会で年金福祉施設の受け皿である独立行政法人の設立が決定されます。本年10月頃からその法人の中で病院の将来の形態が5年をかけて論議されます。我々は現在の公的

病院としての機能の存続を希望し運動を繰り広げています。

玉造病院では手術治療とリハビリテーションの両輪がうまく回転して一人の患者様の機能が回復してゆくという理想的な形態が完成しています。寿命が単に長

いことよりも、生活の質（QOL）を高め、健康寿命が長いことが国の目的となってきました。私どもの病院は機能回復、生活の質の向上を中心として、ほかの近隣総合病院との差別化を図り、ますますその存在意義を世間に認識して頂きたいと思ひます。

医療の現場から ～治療トピックス～

えんげ 嚥下障害の臨床 ～安全に食べるには～

リハビリテーション科医長 目谷 浩通

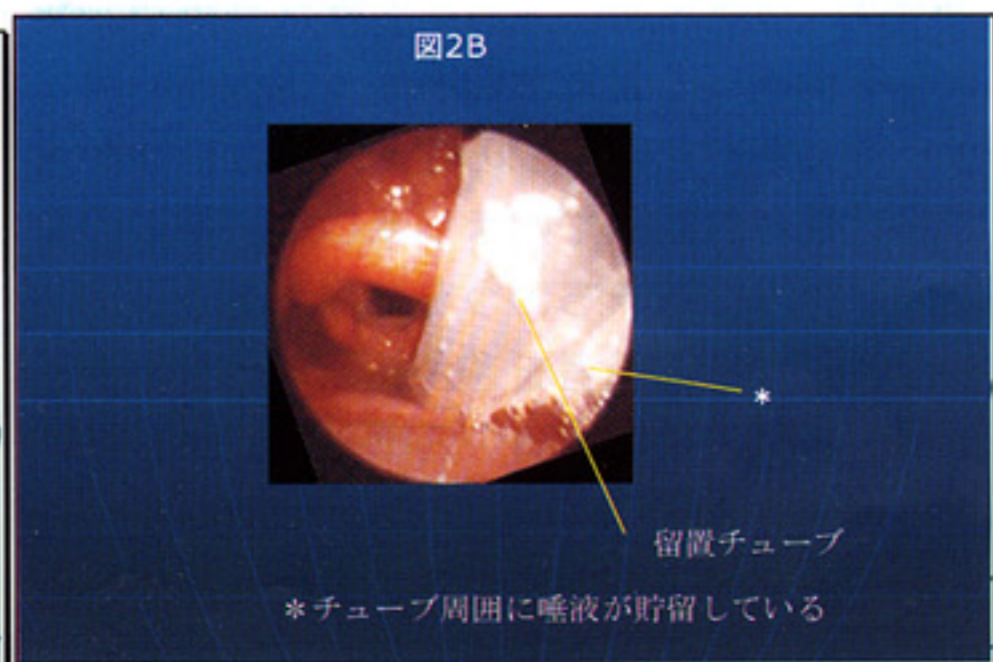
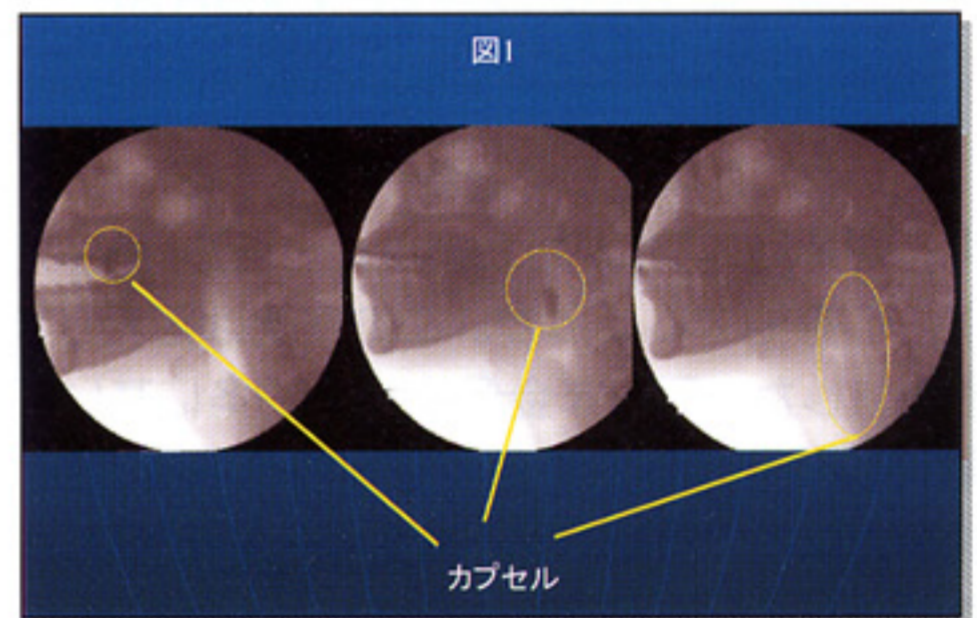


近年高齢化が進むにつれて、脳卒中などにより身体に著しい障害を持った患者様が増加しています。このような方々の自宅療養を充実させるため、地域リハ支援事業が開始され、当院もその拠点病院に指定されています。様々な障害の中でも摂食・嚥下障害（飲み込みが出来なくなる）は、生死にかかわるだけでなく、「生活の質」という点からも大きな問題になります。

摂食・嚥下障害をもった患者様の食事介助をする場合、誤嚥性肺炎や窒息などの危険があります。一歩間違えば命を落としかねません。そこで摂食・嚥下障害を評価することが重要になってきます。当院では、摂食・嚥下障害を評価し、リハビリテーション治療に役立てるため、嚥下造影検査を行っています。嚥下造影検査とは、X線透視下で造影剤入りの食べ物を食べていただく簡単な検査です。図1には、側面から患者様の頭頸部を透視した写真を提示しました。造影剤の入ったカプセルを飲み込んでいる連続写真です。この検査をすることで、障害を持った人でも、安全に食べることができる姿勢や食材を選ぶことができ、リハビリテーション治療に役立っています。

長期間絶食を強いられていた方や鼻からチューブを入れて栄養を摂っていた患者様では、咽喉頭にさまざまな異常が起こり、飲み込みが悪くなることがあります。図2A・2Bには健康成人と嚥下障害を持った患者様、長期にわたってチューブ栄養を継続していた患者様の咽喉頭の内視鏡写真を示しました。図2A

に示すように嚥下障害の方では、声帯周辺の粘膜の浮腫が目立ち、図2Bに示すようにチューブ栄養を継続していた患者様では、チューブ周囲に唾液の貯留が見られます。これが食物の通りを悪くしたり、咽喉頭の感覚を低下させて飲み込み難さを強くします。このことから分かるように、摂食・嚥下障害が疑われる患者様に接する場合、注意深く観察することが重要になります。少しでも異常が疑われた場合には、専門医に相談していただければと思います。



最新MRI装置の導入について

放射線室 勝田 和弘

当院では、患者様に苦痛の少ないMRI検査を受けていただくために、最新鋭のMRI装置を導入しました。これにより、検査の質の向上とともに、より良い検査環境を提供できるようになりました。

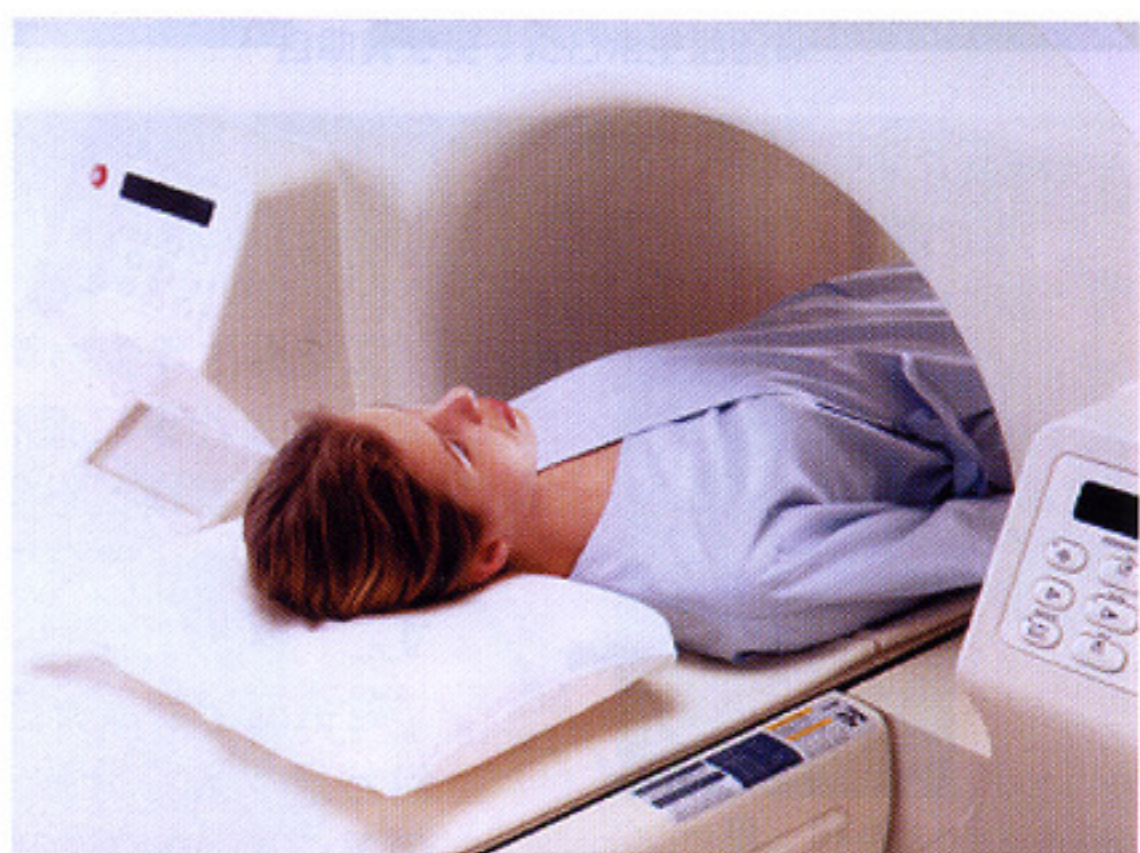
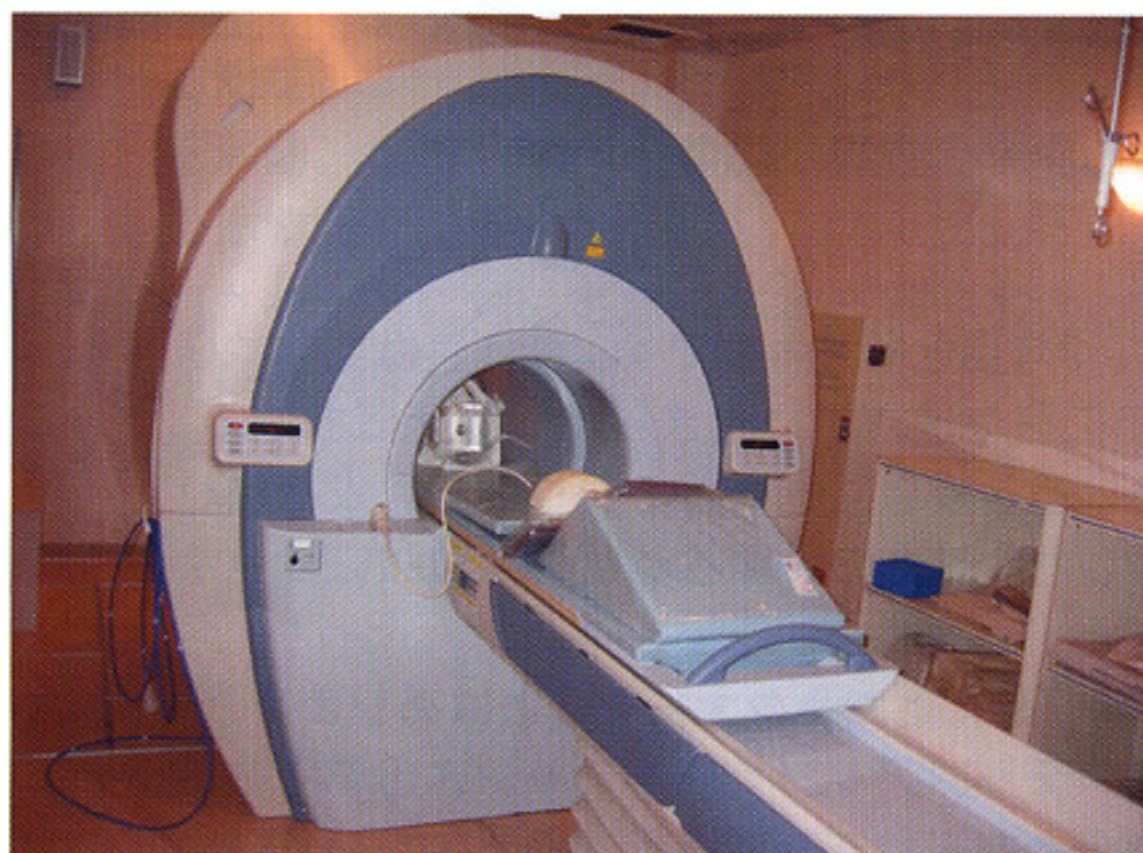
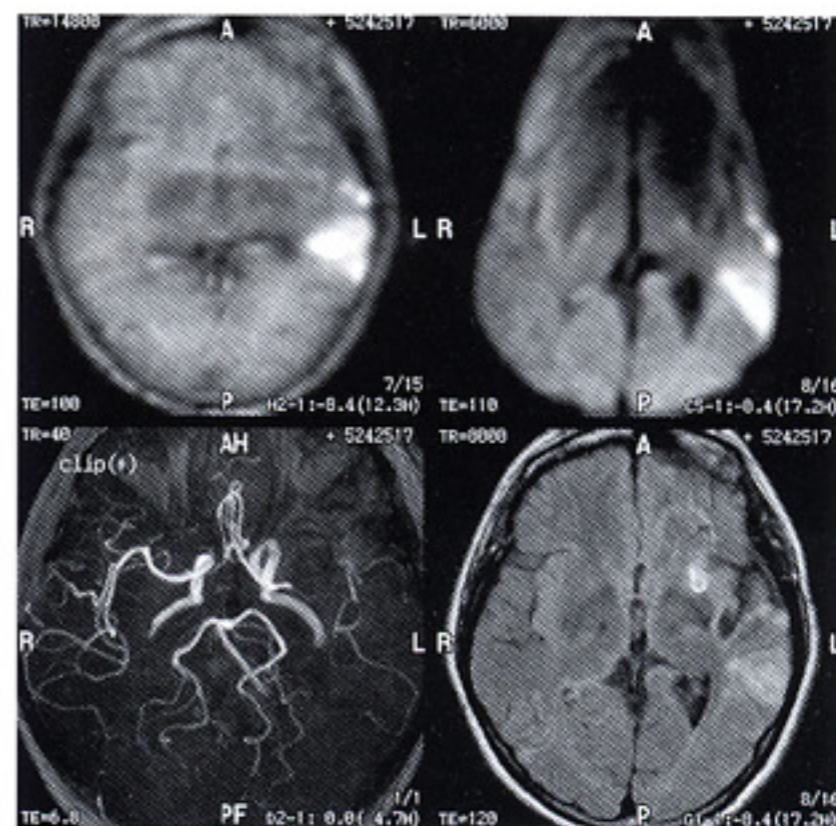
苦痛の少ないMRI検査とは？

- ◆ **静か** 『世界でもっとも静かな1.5T（テスラ）-MRI』
工事現場のような大きな検査音を、大幅に低減。



- ◆ **開放感** 『ガントリが短く、閉塞感が少ない』
検査中の患者様の視野を広げよりリラックスした検査を提供します。
- ◆ **はやい** 『撮影時間 50%~30% 短縮』
患者様の拘束時間を短縮し、苦痛を減らします。
- ◆ **やさしい** 『非造影でのMRアンギオ』
造影剤を使用しないで血管撮影が行なえます。
- ◆ **きれい** 『0.5T→1.5T』

最新型のMRI装置で、全身の画像診断能が大幅に向上します。つまり、「音が静か」、「開放感あり」、「検査時間が短い」、「更に画質もきれい」など、今までの印象とはまるで違うMRI検査が可能になりました。この画期的なMRI装置を通じて、全ての患者様に最高の画像診断をリラックスして受けて頂くために、島根県で初めて導入いたしました。



第1回 病診連携懇談・症例検討会を終えて

整形外科部長 小谷 博信

当院では地域連携室を設置し、患者様を中心に地域の先生方と当院の医師との連携を図りながら、良い医療を効率的に提供できるように努力しております。

このたび、さらに地域の先生方と当院の医師や医療スタッフたちが直接話し合える機会を設け、親睦を図ると共に、症例検討などを通し知見を深める目的で、病診連携・症例検討会が2005年3月16日に松江東急インで開催されました。

平日の午後7時半からの開催でしたが、30名もの地域の先生方に出席いただき、当院のスタッフと合わせ、67名の出席者になりました。

上尾豊二院長の挨拶から始まり、三木堯明副院長の「玉造厚生年金病院の診療状況の紹介」があり、長見晴彦先生（長見クリニック）、関寿大先生（当院整形外科）より症例報告をしていただき、川上誠先生（当院リウマチ科）のリウマチ診療の注意点について講演がありました。そして当院に対する質疑応答では貴重なご意見もいただきました。続いて、八束郡医師会長の伊藤是衛先生より今後の病診連携について協力の呼びかけをしていただき、参加された先生方と親睦を深めることができ、実りある会となりました。

良い医療を効率的に提供したいという思いは、地域の先生方も当院のスタッフも同じで、この検討会を通して病診連携の重要性を改めて認識させられました。

今後、このような会を年2回、また島根県西部地区での開催も予定したいと考えております。



病診連携・病病連携とは；各医療機関（病院&診療所・医院・クリニック、病院&病院）が連携を深め、地域に根ざした医療のサービスの提供、また地域医療の質の向上を図り、患者様が安心して療養できる医療環境をつくることを目的としたものである。



職員紹介



吾郷 竜一
理学療法士
平成16年4月1日採用

玉造厚生年金病院に就職し、2年目となる吾郷です。昨年度は業務や研究発表と仕事に追われるように日々過ぎていきました。臨床において、多くの患者様と出会い、いろいろな疾患に携わっていく中で、人と触れ合う楽しさ、アプローチの難しさ、基本の大切さなど日々勉強になります。

社会に出てよく口にする、責任感だとか色々大変なことはありますが、自分が本気で頑張っている時ステップアップできるチャンスの時！と歯の浮くようなことを考え、向上心を忘れず、患者様から「なかなかいいなあ」って感じてもらえるよう日々精進していこうと思います。



作業療法ってなに？

作業療法士（OT）は理学療法士（PT）や言語聴覚士（ST）と同様リハビリテーション専門職として患者様の生活が改善できるよう日々業務を行なっています。

作業療法とは（社）日本作業療法士協会の定義によると「身体又は精神に障害のある者、またはそれが予想される者に対してその主体的な活動の獲得を図るため、諸機能の回復・維持及び開発を促す作業活動を用いて行う治療・指導・援助を行うこと」とあり、患者様の生活の質（QOL: Quality of Life）の向上を目指します。

当院でのOTは主に

- 骨折などの整形外科手術後の関節可動域や筋力・細かい作業などの巧緻動作などの機能回復訓練
- 脳卒中やリウマチなど日々の生活に支障をきたした患者様に対し、身のまわり動作や家事動作といった日常生活活動（ADL）獲得のための訓練、自助具の検討・作成
- 脳卒中や頭部外傷などに見られる失行、失認などといった高次脳機能障害への訓練
- 廃用症候群の改善と予防（身体機能・精神機能—認知症）
- 趣味活動、地域活動への参加、就労の準備としての作業活動の実施
- 退院される方に対して自主訓練方法や生活上での注意事項などの指導
- 必要に応じて家屋改修や福祉用具の提案や相談などを行っています。



治療用装具装着の様子



家庭復帰のための家事動作訓練



自助具を使った日常生活訓練



細かい作業を通じた機能回復訓練

皮膚の癌を知っていますか？

形成外科 齊藤 晋

年齢を重ねるごとに皮膚にはさまざまな変化が現われてきます。しわが出来たり、まぶたが垂れてきたり、今まで無かったイボのようなものがいつの間にかできていたり、というご経験がある方は多いでしょう。この皮膚の「イボ」のようなものの中に皮膚のガンが隠れていることがあります。右の写真は一見ただのほくろのように見えますが、れっきとした皮膚ガンであり、放っていけばどんどん組織を侵していきます。近年の紫外線量に従い皮膚ガンは増加傾向にあり、オーストラリアやアメリカなどの白人社会ではこの皮膚ガンに対する認知は非常に高く、定期健診を受けるひとは少なくありません。日本ではまだまだ認知は低く、極端に悪い状態で受診される方もおられます。皮膚のガンの特徴として①今まで無かった②どんどん大きくなる③境界がぼやっとしてはっきりしない④傷口のように出血したりする、などが挙げられ、痛みがあったり痒みがあったりすることはまずありません。形成外科の外来ではまず肉眼所見をとり、その後顕微鏡で詳細に観察をします。ガンの可能性があれば細胞の検査をするか、全部切り取る手術をおこないます。皮膚ガンは特に顔面に多く発生し、そのような場合顔に傷ができるのをためらう方がほとんどと思いますが、専門的な特殊な縫合方法により傷は非常に目立たなくなります。小さいうちに切除すれば良い結果となりますので、気付かれた方は一度形成外科外来へお越し下さい。



表紙の写真

春3月、桜に先駆けて咲く彼岸ざくらです。県道から当院への道へ入ると正面に植えられています。

数多い当院の花の木の中で、春一番に咲くのがこの花です。桜より色が濃く春の澄み切った青空に咲く姿は凛としています。花言葉は、「心の平安」です。春を告げる桜ともよばれています。桜の季節を前に心静に待つよう私たちを諭しているようです。(F.S)

編集後記

先日、インターネットをしていると、「精子と卵子が融合する際に不可欠なタンパク質を岡部 勝 大阪大教授らが発見、そのタンパク質を縁結びの神様を祭る出雲大社にちなみ「Izumo」と命名した。」というニュースが紹介されていました。このようなすごい発見に、自分が生まれ育った場所の名が命名されているのを知り、最近の気候の良さも手伝ってか、何とも言えずうれしく、そして和みながら夜は更けていきました。(M.S)

夕映えのバックナンバーはホームページでもご覧になれます。

■ 編集・発行責任者 上尾 豊二

〒699-0293 島根県八束郡玉湯町湯町1-2

TEL 0852(62) 1560

→ <http://fish.miracle.ne.jp/tamahosp/>